

コロナ禍で発展した社会人基礎力

中島 禎志・栗田るみ子

要 旨

2020年度は新型コロナ禍により、多くの大学がほとんどの授業をオンライン授業として開講したが、指導形態の変化を不安視する声もあった（参考文献3）。しかし、オンライン授業だからこそ培われた「社会人基礎力」もあることを本稿では、新型コロナ禍以前の授業と比較することで、明らかにする。本稿では、2019年度と2020年度に開講された情報処理実習科目である、「情報エキスパートⅠ」「情報エキスパートⅡ」の受講者を対象とし、アンケートをもとに分析を行った。

キーワード：社会人基礎力、資格試験、キャリア教育、オンライン授業

1 はじめに

2020年度はコロナ禍により、多くの大学において、大半の授業をオンライン授業とすることを余儀なくされた。オンライン授業の形態としては、大きく2つの形態がある。「ハイフレックス型」と「オンデマンド型」である。「ハイフレックス型」ではリアルタイムに講義を配信し、その講義の模様を録画したものをインターネット上に後日アップロードして一定期間、学生が自由に視聴できるようにするものである。一方、「オンデマンド型」は予め用意された講義資料などをインターネット上にアップロードして一定期間、学生が自由に（オンデマンドに）これらの資料を基に学習するものである。どちらの方式もそれぞれ、メリットとデメリットがあり、講義内容の特性などによって使い分けられた。

本稿では城西大学で開講されている「情報エキスパートⅠ」および「情報エキスパートⅡ」でおこなった2019年度と2020年度のアンケートを比較分析することで、この環境下で学生の受講意識の変容を明らかにし、オンライン授業を通して考えられるこれまでになかった学修の場の提

供の可能性について考察する。なお、アンケートの自由記述の設問は KhCoder3 を用いて分析した。

2 「情報エキスパートⅠ」および「情報エキスパートⅡ」について

2-1 学習内容

分析の対象とする「情報エキスパートⅠ」および「情報エキスパートⅡ」は、ITパスポート試験に準じた内容の講義および演習を行うことで、情報リテラシーのより高度なレベルの知識を身につけることを目的とした科目である。なお、履修者にはITパスポート試験の受験を奨励している。

ITパスポート試験は「ストラテジ系」「マネジメント系」および「テクノロジー系」からなる試験で、「ITを活用するすべての社会人・これから社会人となる学生が備えておくべき、ITに関する基礎的な知識が証明できる国家試験」として2009年より行われている。このうち「ストラテジ系」は経営全般に関する分野で城西大学経営学部の学生には取り組みやすい分野と思われる。なお、試験は、受験者の希望に合わせて行われるCBT（Computer Based Testing）形式である。

「情報エキスパートⅠ」は前期に開講され、ITパスポート試験のテクノロジー系の分野を中心として前期に開講されている。「情報エキスパートⅡ」は後期に開講され、ITパスポート試験のストラテジ系およびマネジメント系の分野を中心として後期に開講されている。

表1および表2は2019年度の情報エキスパートⅠおよび情報エキスパートⅡのシラバスからの授業の目的・目標を抜粋している。2019年度は教科書を「イメージ&クレバー方式でよくわかる 栢木先生のITパスポート教室、栢木 厚、技術評論社」とし、参考文献を「よくわかるマスター ITパスポート試験対策テキスト&過去問題集」（富士通エフ・オー・エム株式会社、FOM出版社）とした。2020年度は教科書を「よくわかるマスター ITパスポート試験 対策テキスト&過去問題集」（富士通エフ・オー・エム株式会社、FOM出版社）に、参考文献を

表1 2019年度・2020年度の情報エキスパートⅠシラバス（授業の目的・目標）

授業の目的・目標	ITは、今や私たちの生活の基盤であるとともに、ビジネスを行なう上で必要不可欠な経営資源の一つになっています。また、ITを正しく活用するための情報モラルや個人情報の保護などの、幅広い知識をバランスよく身につけることが必要です。このITに関する基礎知識を習得していることを証明する国家試験にITパスポート試験があります。この授業は、ITパスポート試験のシラバスに準拠して進んでいき、学生がITに関する知識を身につけ、国家試験に合格することを目標とします。特に、本講義ではITパスポート試験の「テクノロジー系」に重点をおきます。（汎用的技能）
----------	--

表2 2019年度・2020年度の情報エキスパートⅡシラバス（授業の目的・目標）

授業の目的・目標	今や私たちの生活の基盤であるとともに、ビジネスを行なう上で必要不可欠な経営資源の一つになっています。また、ITを正しく活用するための情報モラルや個人情報の保護などの、幅広い知識をバランスよく身につけることが必要です。このITに関する基礎知識を習得していることを証明する国家試験にITパスポート試験があります。この授業は、ITパスポート試験のシラバスに準拠して進んでいき、学生がITに関する知識を身につけ、国家試験に合格することを目標とします。特に、本講義ではITパスポート試験の「マネジメント系」と「ストラテジ系」に重点をおきます。（汎用的技能）
----------	---

「いちばんやさしいITパスポート 絶対合格の教科書+出る順問題集」（高橋京介，SBクリエイティブ）とした。

城西大学経営学部では、ディプロマ・ポリシー，カリキュラム・ポリシー，アドミッション・ポリシーを掲げている（参考文献1）。

「情報エキスパートⅠ」および「情報エキスパートⅡ」においては、アドミッション・ポリシーに基づいて入学した学生に対し、カリキュラム・ポリシーの特に、「将来の幅広い進路に対応した経営学，マーケティング，会計の知識・技能・問題解決能力を修得する教育を行います。」、「プロフェッショナルとしてグローバルに活動する基盤を形成するための情報通信技術，英語，会計の基礎教育を行います。」および「大学卒業後の社会生活に向けた職業観を形成し，実務知識を修得するキャリア教育を行います。」を意識している。つまり、ITパスポート試験の出題範囲を網羅することで、情報通信技術の知識や情報通信技術を通しての経営学の修得を目指している。また、「ITパスポート試験」への合格という明確な目的を掲げることで、問題解決能力の修得を目指している。なお、問題解決についてのフレームワークであるPMBOKの概要については、ITパスポート試験のカリキュラムに組み込まれており、理論的な修得も本科目において可能である。これらを修得した学生には、ディプロマ・ポリシーの一部である、「幅広い教養とマネジメント（経営学，マーケティング，会計など）についての専門的知識」，「地域社会や国際社会で活躍するための基礎的能力（コミュニケーション・リテラシーとメディア・リテラシー）」および「マネジメントに関わる問題や課題を自ら発見し，解決するための思考力・判断力・実践力」の修得が期待される。

2-2 2019年度を受講生と2020年度を受講生

2019年度の「情報エキスパートⅠ」と「情報エキスパートⅡ」の受講者およびアンケートへの回答者は以下のとおりであった。表3から、1年生の履修者が最も多いことがわかり、学年が進むほど履修者数が減っている。低学年ほど単位の獲得に熱心であり、高学年であれば卒業要件を満たしているために学生自身の興味に基づいて履修が行われる傾向にあることや就職活動等で

履修を断念するといったこともあるものと思われる。ただ、ITパスポート試験は経営学におけるさまざまな分野の知識も問われるため、高学年次での履修が望まれる。また、「情報エキスパートⅠ」と「情報エキスパートⅡ」の履修者を比較するなら、「情報エキスパートⅡ」の履修者が「情報エキスパートⅠ」の履修者に比べ減少している。このことは、「情報エキスパートⅠ」を履修した結果、志向と合わないと感じる学生が生じるためと思われる。

表3 2019年度の履修者の内訳

	情報エキスパートⅠ	情報エキスパートⅡ
受講者数	62名 2016年度生 6名 2017年度生 4名 2018年度生 16名 2019年度生 36名	44名 2016年度生 6名 2017年度生 2名 2018年度生 11名 2019年度生 24名
アンケートへの回答者数	54名	開始時 33名, 終了時 42名

本稿では、このうち「情報エキスパートⅠ」および「情報エキスパートⅡ」のどちらの授業も受講し、すべてのアンケートに回答した27名を分析対象とした。対象とした学生の入学年度別の内訳は次のとおりであった。

表4 2019年度調査対象者の内訳

2017年度入学	2名
2018年度入学	5名
2019年度入学	19名

2020年度の「情報エキスパートⅠ」と「情報エキスパートⅡ」の受講者およびアンケートへの回答者は以下のとおりであった。表5からは、2019年度より履修者が増えていることがわかる。コロナ禍により社会経済情勢が悪化することが予測されることから、資格取得の意識が学生の中に芽生えたことを反映しているものと思われる。「情報エキスパートⅡ」の履修者が「情報エキスパートⅠ」より少ないことは、2019年度と同様の理由によるものと思われる。

表5 2020年度の履修者の内訳

	情報エキスパートⅠ	情報エキスパートⅡ
受講者数	91名 2015年度生 1名 2016年度生 2名 2017年度生 4名 2018年度生 31名 2019年度生 20名 2020年度生 33名	77名 2017年度生 2名 2018年度生 28名 2019年度生 19名 2020年度生 28名
アンケートへの回答者数	開始時 94名, 終了時 62名	開始時 59名, 終了時 80名

本稿では、このうち「情報エキスパートⅠ」および「情報エキスパートⅡ」のどちらの授業も受講してすべてのアンケートに回答した 32 名を分析対象とした。対象とした学生の入学年度別の内訳は次のとおりであった。

表 6 2020 年度調査対象者の内訳

2018 年度入学	11 名
2019 年度入学	7 名
2020 年度入学	24 名

なお、本アンケートの分析対象となった学生は、2019 年度と 2020 年度では異なる学生であった。

まず、学生の全体的な傾向を明らかにしたい。これは参考文献 2 で明らかになったように城西大学経営学部の学生のキャリア志向を反映している。

設問「どのような資格をとりたいですか」の回答は図 1 のようになった。学生の取得したい資格は城西大学経営学部のミニマムスタンダードである「日商または全経簿記 3 級」、「日商 PC 検定 データ活用ベーシック」および「TOEIC 400 点」の延長にあることがわかる。19 年度の平均選択数は 3.0 で、20 年度の平均選択数は 3.2 であった。

設問「将来どのような職業につきたいですか」での回答は図 2 のようになった。19 年度の平均選択数は 1.6 で、20 年度の平均選択数は 1.9 であった。20 年度は、19 年度に比較して将来の職業について積極的に考えている学生が多いことが伺える。また、19 年度に比して 20 年度は技

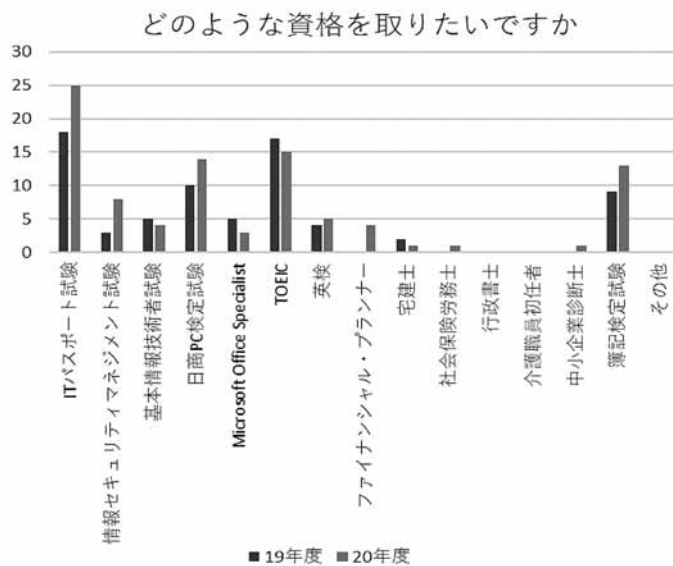


図 1 学生の資格取得意向

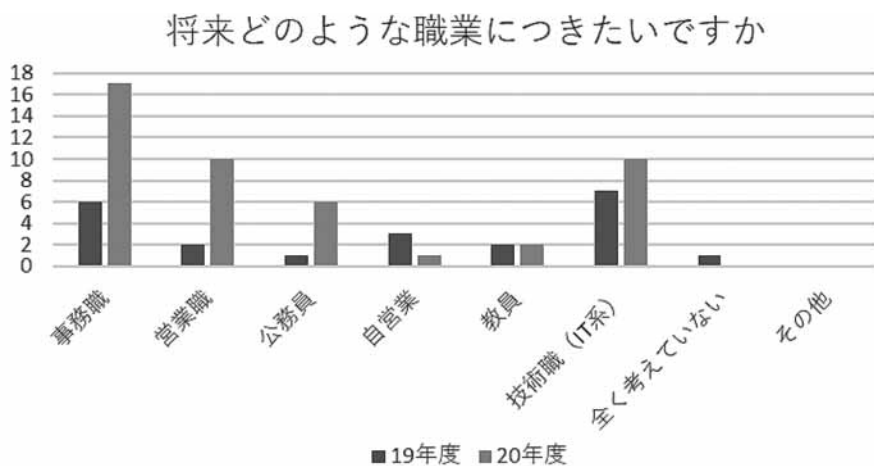


図2 希望職種

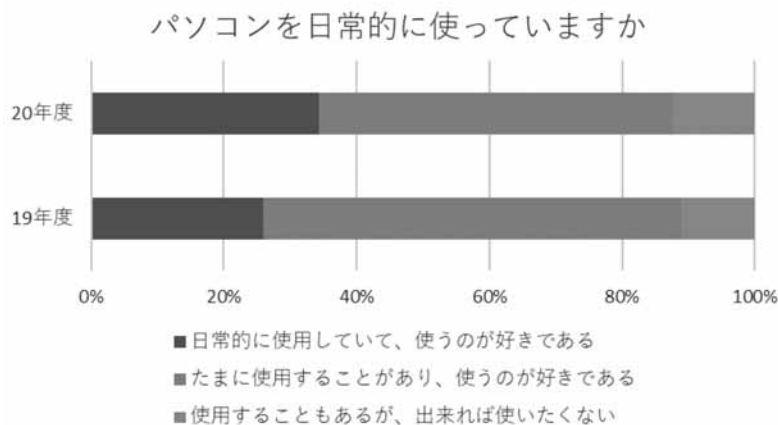


図3 学生のパソコンの使用状況

術職 (IT系) を希望していない学生も本科目を履修していることがわかる。ITの浸透とそれに加えてコロナ禍によりさまざまな場面でのオンライン化の進行がこのような傾向を促しているものと推察される。

設問「パソコンを日常的に使っていますか」での回答は図3のようになった。全体的にパソコンを選好して使用していることが伺えるが、2020年度は特にその傾向が強いことがわかる。一方で、「使用することもあるが、出来れば使いたくない」と答えた学生は2019年度に比して2020年度はわずかではあるが、増加している。これも社会的な情勢を反映して、嫌でも使わなくてはならないということを実感することが増えていると思われる。

以上より2019年度と2020年度の受講学生は、大きな違いがあるとは言えないが、2020年度の受講生の方が将来について具体的なビジョンを描いているように思える。

3 2019年度の学生の意識

2019年度の「情報エキスパートⅠ」および「情報エキスパートⅡ」の設問「本講義の受講を通して、自分のどのようなところが伸びましたか。学力に限らず教えてください。」のKhCoder3による共起ネットワークは図4および図5のようになった。

「情報エキスパートⅠ」における共起ネットワーク図4から、学生は知識面での学びを主に挙げていることがわかる。

まず、「用語」「IT」「パソコン」「理解」を中心としたネットワークを形成していることから、「情報エキスパートⅠ」がITパスポート試験のテクノロジー系であることを直接反映している。

次に、「力」を中心とした左下のネットワークは「考える」「調べる」「出す」といった語に結び付いている。この中で、「出す」という語は「課題を出す」「宿題を出す」という内容の回答から表れている。このネットワークは、この授業を通して、考える力、調べる力、提出期限を守る大切さといったことを学生が養ったことを反映している。

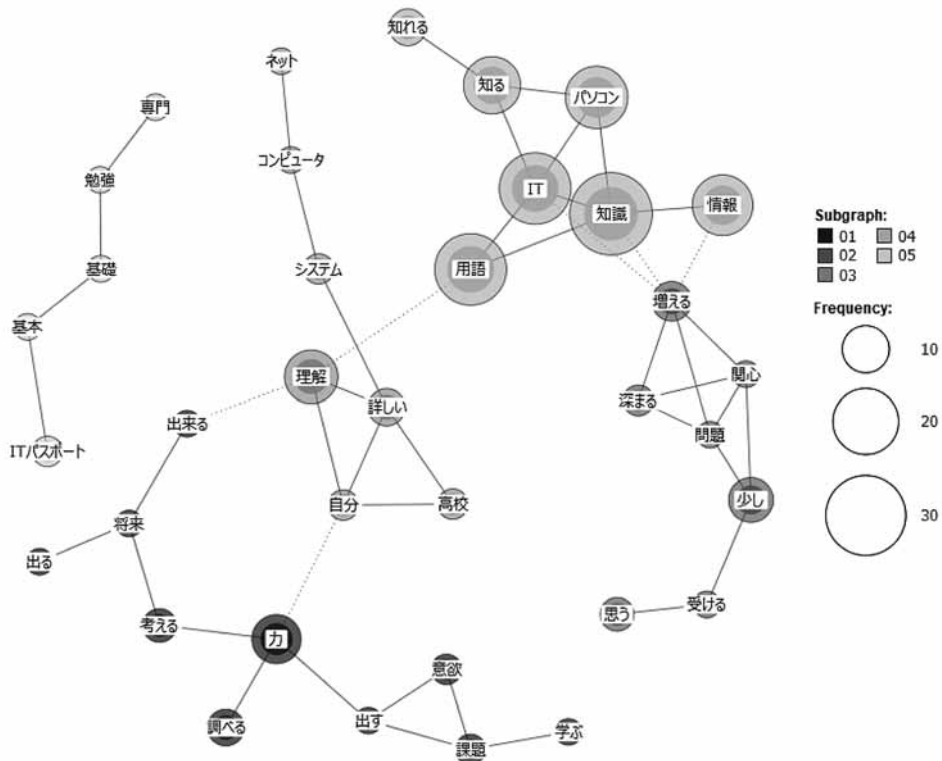


図4 2019年度「情報エキスパートⅠ」の共起ネットワーク

最後に、右上の「ITパスポート」「基本」「基礎」といったネットワークや右下の「増える」「少し」といったネットワークは、テクノロジー系の知識に関する授業内容を反映している。なお、「少し」という語は「ITについて少し理解できた」「ITに関する知識を少し知ることができた」「解けない問題や分からない問題も少し解けるようになった」といった内容の回答を反映している。

「情報エキスパートⅡ」における共起ネットワーク図5からは、授業全体に対する感想と今後の展望を主に述べていることがわかる。

まず、「ITパスポート試験」と「試験」の2語からなるネットワークでは、今後のITパスポート試験への受験意向が述べられている。これと同様のことは「講義」を中心としたネットワークにも見られた。

次に、「受ける」を中心としたネットワークは「授業」とも結び付いている。学生の回答は「授業を通して理解が深まった」「興味が出た」という内容の記述が見られたことから、授業を通してIT分野への興味や理解が深まったことを反映している。また、「勉強」や「知る」といった語のネットワークも「IT分野への知識が増えた、勉強するようになった」という内容の記述

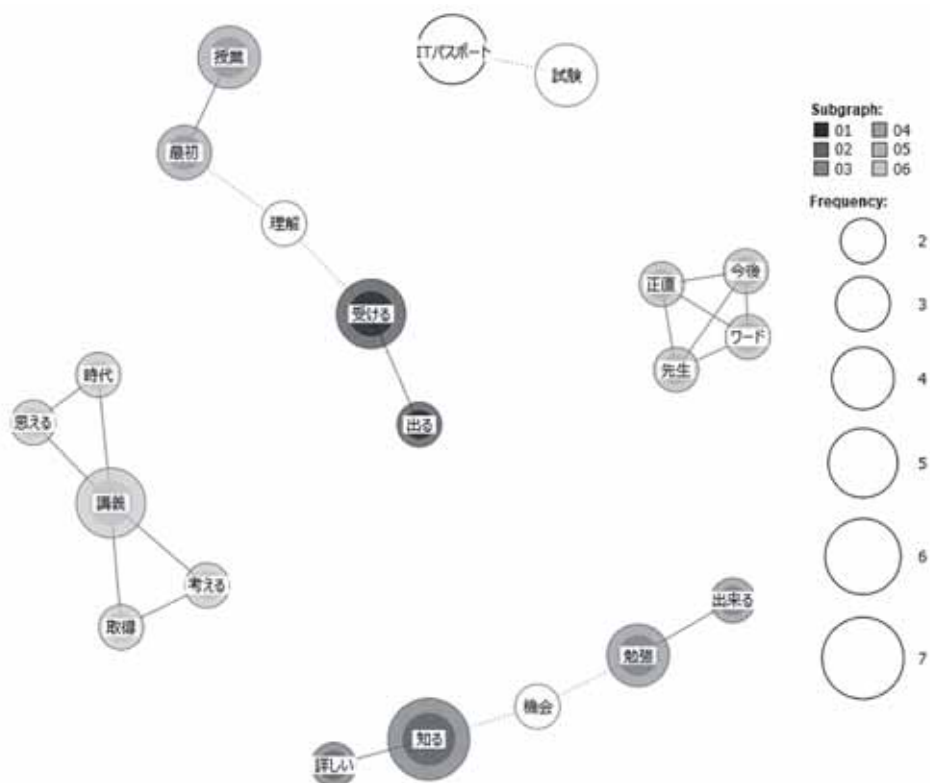


図5 2019年度「情報エキスパートⅡ」の共起ネットワーク

を反映している。

最後に、「先生」「正直」「今後」「ワード」といったネットワークでは、教員への激励や感謝に関する記述が見られた。なお、ここでの「ワード」はITパスポート試験の用語のことである。

4 2020年度の情報エキスパートの授業形態

2020年度は、COVID-19の感染拡大防止のため、すでにふれたように城西大学においても前期（4月～9月）の授業においては、全てオンライン授業となった。また、後期（10月～3月）の授業は、オンライン授業と対面授業を各科目の性質に合わせて混在する形で行われた。「情報エキスパートⅠ」および「情報エキスパートⅡ」においては、どちらもオンライン授業で行った。

「情報エキスパートⅠ」では、WebClassを用いて資料を配信した。また、資料の内容の理解度や修得度をチェックするために10問から20問程度のテストを毎回行った。なお、このテストはITパスポート試験の過去問から出題し、8割以上の正解を義務とした。

「情報エキスパートⅡ」では、「情報エキスパートⅠ」でのオンライン授業のための教材に加えて、資料の解説動画をMicrosoft Streamにアップロードして、学生の理解を促した。

このような形式をとった理由は、3つある。

まず、突然のオンライン授業ということもあり、講師と学生の双方において、ネットワークに関する環境やそれに伴う機器の操作などへの熟達度が低いことで授業の進行が滞ることを避けるためである。

次に、最初の理由とも関連があるが、ネットワークのトラブルにより学生から講師の声が聞こえないといった苦情への配慮である。やはり、授業中に突然、講師の声が聞こえないといったトラブルが起きると、学生としては講義に参加し続けることも苦痛であり、ネットワークの環境が回復しても、講義は進行しており、学生は取り残されたという思いに捕らわれてしまう。このような事態を避けるためである。

最後に、科目の特性上、学生が自由に復習できる状況を確保しなかったためである。そのため、本講義の資料は、前期、後期の授業の終了後も1か月程度公開した。

5 2020年度の学生の意識

2020年度における設問「本講義の受講を通して、自分のどのようなところが伸びましたか。学力に限らず答えてください。」の共起ネットワークは、それぞれ図6と図7となった。

「情報エキスパートⅠ」における共起ネットワーク図6は、左上の「学習」からなるネットワー

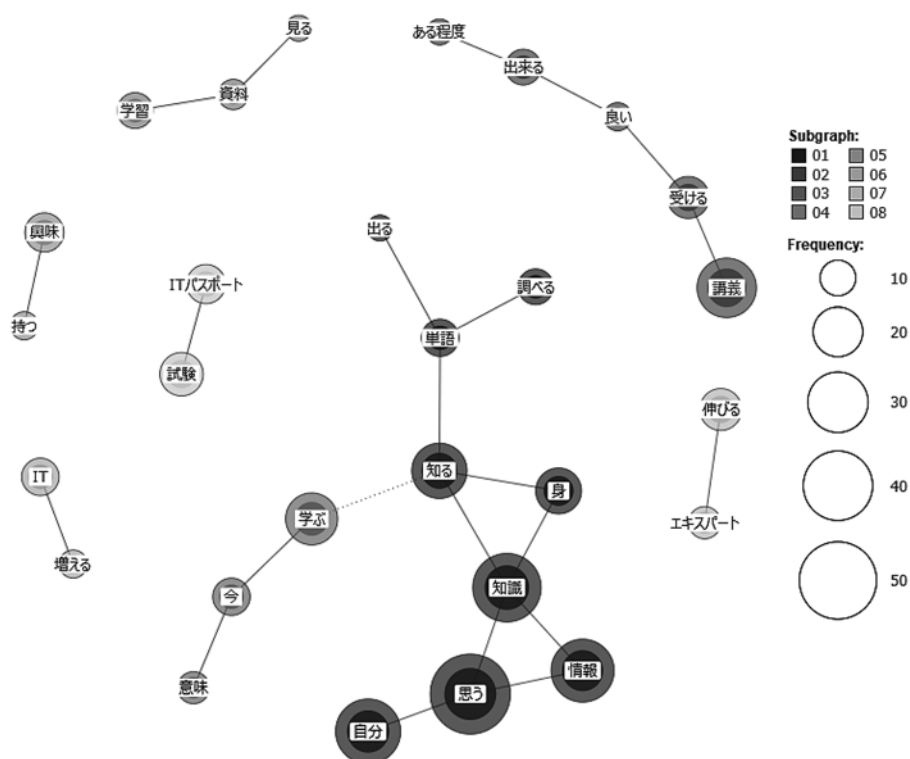


図6 2020年度「情報エキスパートI」の共起ネットワーク

クと右上の「講義」からなるネットワークとそれ以外に分けることができる。

左上「学習」「資料」「見る」からなるネットワークと「講義」「受ける」「良い」からなるネットワークは、コロナ禍での授業形態を反映したものとなっている。実際、「自主的な学習態度が養われた」「わからないところは資料や動画を繰り返し読んだり見たりした」といった内容の回答がなされている。また、一方でオンライン授業となったことから「直接受けないと内容が難しい」や「直接授業を受けたかった」といった内容の記述も見られた。

それ以外のネットワークでは、学生は知識面での学びを挙げていることがわかる。これは2019年度と同じ傾向にある。特に、「ITパスポート試験」や「IT」を中心としたネットワークを形成していることや、「知識」「思う」「情報」といった語が中心となっているネットワークが一番大きいことからわかる。

「情報エキスパートII」における共起ネットワーク図7は、ITパスポート試験に関する知識の拡充を評価したものと合格への決意表明、課題発見力や課題解決力を身につけたことを評価したもの、そして、将来への展望を述べたネットワークに分けられる。

まず、ITパスポート試験に関する知識の拡充を評価したものと合格への決意表明に関するネッ

来なくなってこのような結果となったことが推察される。

最後に、将来への展望を述べたネットワークは右下の「少し」「将来」「知る」からなるネットワークである。ここでの記述は就職活動や就労した際に役に立つだろうといった内容であった。

6 キャリア教育

全ての学校教育におけるキャリア教育はすでに国が中心となって取り組みがなされている。キャリア教育の観点としては、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」というキャリア教育、そして、「一定又は特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる教育」の職業教育としての。

6-1 大学におけるキャリア教育

文部科学省は大学のキャリア教育における専門性を高めるために、「大学の教育課程自体にキャリア教育の観点を加える必要がある」として、2009年には大学教育の質の保証と学生支援充実の観点より、職業指導の実施を法令上に明確化することを提言した。

図8の中央教育審議会(2011)が提言している『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育

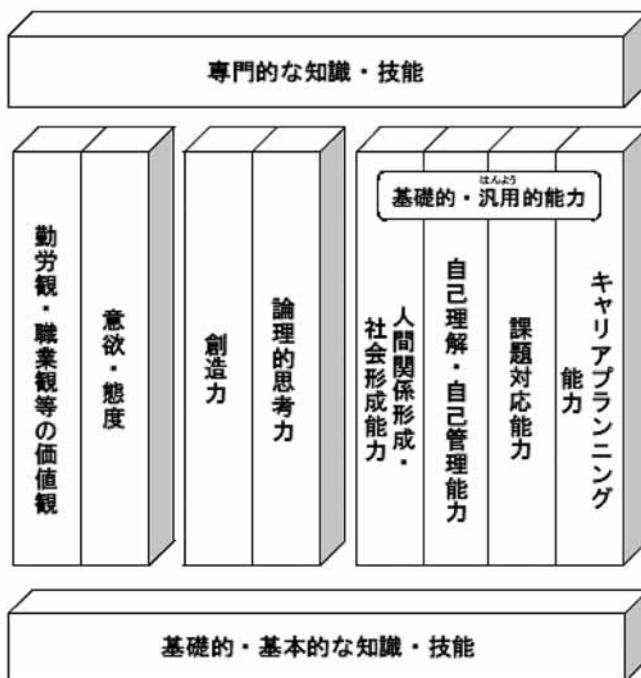


図8 「社会的・職業的自立，社会・職業への円滑な移行に必要な力」の要素（参考文献5）

の在り方について』の職業指導の観点を踏まえ、経営学部ではキャリアセンターの協力を得て、キャリアガイダンスを2年生、3年生へ向け実施している。また、1年次から4年次の4年間のゼミ活動に組み込むことで、教員の専門性と連動することでその効果を深めている。

6-2 社会人基礎力

キャリア教育の一環として、経済産業省は2006年に社会人基礎力として、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」を提唱した。必要な基礎的な力を以下に示す、「社会人基礎力（=3つの能力・12の能力要素）」と定義したのである。

能力1 前に踏み出す力（アクション）

- 主体性……物事に進んで取り組む力
- 働きかけ力……他人に働きかけ巻き込む力
- 実行力……目的を設定し確実に行動する力

能力2 考え抜く力（シンキング）

- 課題発見力……現状を分析し目的や課題を明らかにする力
- 創造力……新しい価値を生み出す力
- 計画力……問題の解決に向けたプロセスを明らかにして準備する力

能力3 チームで働く力（チームワーク）

- 発信力……自分の意見をわかりやすく伝える力
- 傾聴力……相手の意見を丁寧に聞く力
- 柔軟性……意見の違いや立場の違いを理解する力
- 状況把握力……自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
- 規律性……社会のルールや人との約束を守る力
- ストレスコントロール力……ストレスの発生源に対応する力

さらに、2017年には、人生100年時代や第4次産業革命を迎えつつある現代において、社会人基礎力はその重要性を増すとともに新たな視点・切り口が求められるようになり、今後社会とのかかわりが長くなるであろう個人が社会と関わり、生涯活躍し続けるために必要な力として「人生100年時代の社会人基礎力」が定義された。これは、2006年に定義した社会人基礎力の、3つの能力・12の能力要素を内容としつつ自己認識とリフレクション（振り返り）を通して目的・学び・統合のバランスを図ることで、能力を発揮しキャリアを切り拓くのに役立つことが期待されたものである。

「人生100年時代の社会人基礎力」は、これまで以上に長くなる個人の企業・組織・社会との

	就学前教育 幼稚園教育要領 保育所保育指針	初等中等教育 学習指導要領	高等教育 大学設置基準等	教育と社会との関係の接続 (これまでの重点)	新人 社会人 社会人基礎力 (2006)	中堅 社会人	中高年 社会人
何を学ぶか【学び】	・学びに向かう力がついているか	・主体的に自己を発揮しながら学びに向かう態度はついているか	・どんな専門分野を修めて社会で活躍するための礎とするか		・自らが付加価値を生み出すための学びはなにか ・学びの広さや深さを得られるか	・強みを伸ばし、弱みを克服する学びはなにか ・社会や技術の変化に対応するための学びはなにか	・持続的に活躍し続けるために必要な学びはなにか ・経験等を引き継ぐための学びはなにか
どのように学ぶか【統合】	・大人との触れ合いは十分か ・他者との関わりは十分か	・学校種間の連携や交流は十分か ・共に尊重し合いながら協働して生活していく態度はついているか	・年代、地域、文化などを超えた多様な人と関わっているか		・多様な人と出会い、視野を広く持ち、多様な機会を得ているか	・多様な人との関係を構築し、価値の創出に向けて組み合わせているか	・多様な人との関係を活用し、活躍の場や活動の領域をこれまでより広げているか
どう活躍するか【目的】	・よりよい生活を営もうとしているか	・自分のよさや可能性を認識しているか	・得手不得手を踏まえて、企業・社会とどのように関わりたいか		・組織や家庭との関係でどんな自分でありたいか	・自己実現するためにどのような行動が必要か	・これまでの経験を踏まえ自らが社会に提供できる価値はなにか
3つの能力 12の能力要素	リフレクション（振り返り）				リフレクション（振り返り）		
	・主体的・対話的で深い学び ・キャリア教育の充実				・多様な経験の積み重ね ・リフレクションと多様なフィードバックの積み重ね		
	教育や体験活動を通じた育成／育成の支援				仕事や地域での実践を通じた深化／研鑽環境の整備		

図9 「人生100年時代の社会人基礎力」の「気づき」の設定（参考文献6）

関わりの中で、能力を発揮するにあたって、自己を認識してリフレクション（振り返り）しながら、目的、学び、統合のバランスを図ることが、自らキャリアを切りひらいていく上で必要と位置付けられる。また、経済産業省は、2018年に「人生100年時代の社会人基礎力」の「気づき」の設定を行い、個人が「自ら持つ・持たざる能力や体験」を振り返るための、ライフステージの各段階で意識することが求められる各項目における「問いかけ」を示し、振り返りを行うことが重要であるとして具体化した（図9）。

7 まとめ

本研究での調査では、2019年度と2020年度の授業での学びを比較した。受講者は授業を通していずれも知識面での力が付いたと評価している。また、2019年度では、課題をもとに学習することで学習意欲の向上が見られたが、2020年度においては、オンライン授業のなかで予習や復習、そして学生自身が自ら計画的に実行する力を養成することができた。

2020年度のみアンケートの設問項目として、「経済産業省は社会人基礎力として次の項目を挙げています。本講義を通して身についた力はどれですか？（複数回答可）」として学生に自由に回答してもらったところ、図10の結果を得た。

この結果からは、「主体性」「課題発見力」「計画力」「柔軟性」が身についたと学生自身は評価

身についた社会人基礎力

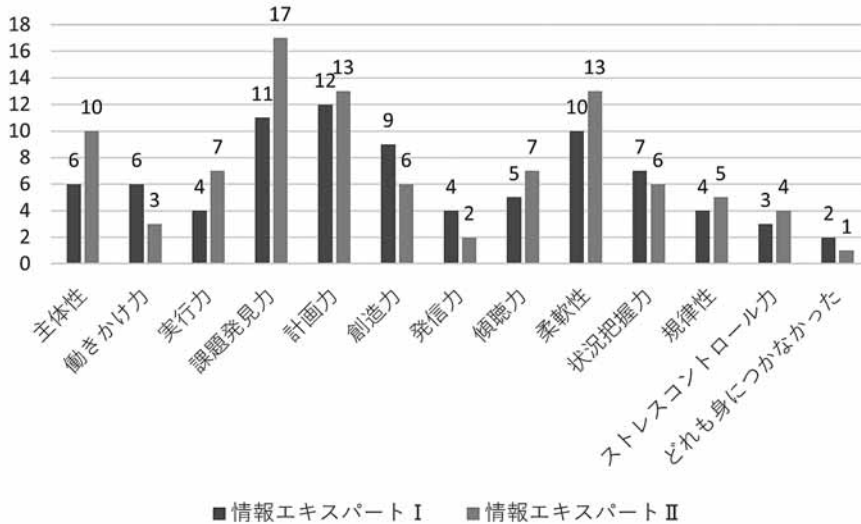


図 10 身についた社会人基礎力

していることがわかる。

この4点の学びは、基礎的汎用的能力の課題対応能力で、図9に示した、社会人基礎力の「自らが付加価値を生み出すための学び」である。検定試験の学習パターンが効果を発揮したといえる。各自の学びの現状は授業を受けるにあたっての知識技能の力であり、検定試験を受験するにあたっての現状である。さらに、合格するためのあるべき姿は、課題発見として各自の学びへの計画を明らかにすることになる。現状と合格のためのあるべき姿の2つの「ギャップ」を授業で常に比較し、合格へ向けた知識と技能を身につける作業を計画的に繰り返すことで、主体性を育成することができた。

資格取得という明確で端的なゴールは各自の力を認識することで、合格へのあるべき姿と比較しやすいことで効果的な授業運営が実現したと考える。オンライン授業と対面授業の指導方法の変化は学生の学びの変化とリンクすることから、今後さらに指導法において比較検討が必要となる。

教員にとってはオンライン授業のオンデマンド型では準備に多くの時間がかかる。また、ハイフレックス型ではオンラインで受講する学生とオフライン（対面）で受講する学生の両方に注意を払わなくてはならない。したがって、教員には多くの負担がかかる。

学生にとっても、主体性や計画力といった能動的自主的な活動が求められるものである。このことが反映している。

コロナ禍により全国的に大学の授業がオンラインに移行したことにより、大学側も学生側も試

行錯誤の中で授業は実施された。そのことにより、このような中でも卒業の延長などの処置がとられなかったことは特筆すべきことである。

この中で、萩生田文部科学大臣（当時）は文部科学省に届くメールや問い合わせの「圧倒的多数」が対面再開を求めるものだったことを挙げ、「対面式」の重要性を訴えた（参考文献3）。

一方、文部科学省は2021年5月25日、「新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査」の結果を公表している（参考文献4）。その中で、2020年度後期はオンライン授業がほとんど・すべてだったと回答した学生は全体の6割で、オンライン授業の満足度は、不満より満足が上回っている。

これらのことから、オンライン授業でも学生の中に培われるものは多くある。そして、さらに言うならば、オンライン授業だからこそ培われるものもあり、対面授業だからこそ培われるものもある。今後は各授業科目の内容を精査してどちらがより効率的で合理的であるか科目の内容によって、授業形態が共存していくことが望ましいだろう。そうすることで、より多くの学修の場を提供することが出来るものと思われる。生涯学習の場は駅の周辺に設けられるサテライトキャンパスばかりではなく、より開かれた大学の形態が考えられる。

参考文献

1. 城西大学経営学部3つのポリシー, <https://www.josai.ac.jp/education/management/about/policy/education.html>
2. キャリア形成を踏まえた経営学部教育の実態と方向——「キャリア・グローバル指向の経営学部教育に向けた実態調査」を中心に——, 坂上順子, 上村聖, 小野正人, 城西大学経営紀要, 15, 71-110 (2019).
3. 大学授業 対面と遠隔「ハイブリッド型」充実を 文科省調査に学生側提案, 毎日新聞, 2020年12月23日, <https://mainichi.jp/articles/20201223/k00/00m/040/220000c>
4. 新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査(結果), 文部科学省, 2021年5月25日, https://www.mext.go.jp/content/20210525-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf
5. 『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』, 中央教育審議会 (2011)
6. 「我が国産業における人材力強化に向けた研究会」(人材力研究会) 報告書, 経済産業省中小企業庁 (2018)

The Fundamental Skills of a Working Adult Developed under the COVID-19 Disaster

Tadashi Nakajima
Rumiko Kurita

Abstract

In the 2020 academic year, due to the COVID-19 disaster, many universities opened most of their classes as online classes, and some people were concerned about this situation (see Reference 3). However, this paper clarifies that there are some “The fundamental skills of a working adult” that were cultivated because of the online classes, by comparing them with the classes before the COVID-19 disaster. The analysis in this paper is based on a questionnaire survey of students who took “Information Expert I” and “Information Expert II” classes offered in the 2019 and 2020 academic years.

Keywords: the fundamental skills of a working adult, qualification examination, career education, online classes